

ステークホルダーのコンセンサスが社会的責任に関する ISO 26000 の開発作業の進展を可能にする

社会的責任についてのガイダンスを提示する ISO 26000 規格は、作業原案(WD)から委員会原案(CD)の段階に進み、規格開発における1つの重要な段階を通過した。これは、ISO 社会的責任作業部会(WG SR)内において、マルチステークホルダーの代表間で高いレベルのコンセンサスが形成されつつあることを示している。

WG SR の第6回総会は、2008 年9 月1 日から5日までチリのサンチャゴ市で開催され、主な成果の1 つとして、WDをCDとして回付するという決議が承認された。この会議には、77 の ISO メンバーと32 のリエゾン機関から386 名もの専門家が出席し、これまで開催されたISO 規格開発会議の中で最大の会議の1 つとなった。

WG議長のJorge E.R. Cajazeiraは、「CD 段階に進むという決定は、ISO 26000 規格開発プロセスにおける1つの達成目標が実現されただけでなく、この作業のためにISO が採択した、マルチステークホルダーが関与するという手法が、大規模で多様な集団の中で複雑な問題を処理するのに効果的なツールであるということを示す生きた証拠です。」と述べている。Staffan Söderberg 副議長は、「私にとって最も印象的だったのは、SR の専門家たちが、最も難しいテーマについてさえも積極的にコンセンサスを得る、また得ようとするというその姿勢です。今回の会議を通じて、ステークホルダーとの対話の強さが証明されました。」と述べている。

このWG SR には、産業界、政府、労働、消費者、NGO、サービス・サポート・研究・その他の6つのステークホルダーグループの代表が参加している。ISO 26000 の原案の見直しと改訂の責任を担う統合原案タスクフォース(IDTF)には、各ステークホルダーグループからそれぞれ2名（先進国から1 名、途上国から1 名）が参加している。また、このIDTF には、国際労働機関と国連グローバルコンパクトの代表も参加している。

サンチャゴ総会の前に、WG SR は、ISO 26000 第4 次作業原案第2 版(WD4.2)に対して、約5,200 件のコメントが寄せられた。IDTF は、これらのコメントに基づいて、総会で取り上げなければならない主要な項目として、次のものを特定した。

1. 国際的行動規範
2. 社会的責任イニシアチブへの参照の本質

3. 政府への言及の本質
4. 影響の範囲（バリューチェーン及びサプライチェーンに関連する課題を含む）
5. ピック・アンド・チューズ（優先順位の設定、及び関連性並びに重要性に関する課題を含む）

これらの問題について十分な前進があり、コンセンサスも得られたため、ISO 26000 はCD の段階に進むことができ、CD 原案は、2008年12月に公表された。国際規格としてのISO 26000 の発行は、現在、2010 年9 月を予定している。

WG SR の第6 回総会は、チリ標準化協会(INN)の主催によって開催され、開会式では、Hugo Lavado 経済大臣、Osvaldo Andrade 労働大臣、INN のExecutive Director であるSergio Toro 氏によるスピーチがあった。

Jorge Cajazeira議長は、ISO 26000 の開発の現状について、「ISO 26000 が、世界中の公的機関や民間企業に理解され、適用されるようになるために、世界人権宣言などの高度な国際協定から生まれた原則や期待を規格の中にかにしてい取り入れていくかがわかってきたことは、私たちにとって励みになります。」とまとめた。

Kevin McKinley ISO 事務局次長は、サンチャゴにてWG SR のレセプションでスピーチを行った際、WG SRが達成した成果を称え、「社会的責任に関するWG は、ISO ファミリーの中で興味深く重要な発展を象徴しています。ISOの規格作業プログラムでこのプロジェクトに着手して以来、私は、社会的責任というこの非常に広大で難解なテーマに対して、模範となるような高いレベルの貢献、努力、専心的な活動、そしてステークホルダーの積極的な関与を見てきました。」と述べた。

ISO 26000 の作業原案段階での 発展途上国のための活動に関する報告

マーティン ニューレーター記

WD の 4 つの異なるバージョン及びサブバージョンの作成中、ISO 発展途上国対策委員会 (ISO DEVCO) は、内容の普及を支援するためだけではなく、発展途上国に見解及び意見を表明する機会を与え、それを開発プロセスに取り込むことができるようにするために、一連の地域及び国内ワークショップを開催した。ISO は、この規格の策定にあたり、新しい方法に着手したが、それは世界中の多くの利害関係者にとって馴染みのないものであるため、これは手続き上の問題と組み合わせられる場合が非常に多かった。これらのワークショップは、「規格の責任者」と直接話し合い、懸念、疑問、考えを表明し、我々が使用しているプロセスをさらに進めるためのユニークな機会を与えた。

主として 3 名の規格策定コンビナーがワークショップに関与したが、我々は世界中を回り、場合によっては、更に多くの TG リーダー又は ISO 中央事務局と共同で開催された。この種の最初のワークショップの 1 つは、2006 年初めにケニアのナイロビで開催され、その少し後に、東

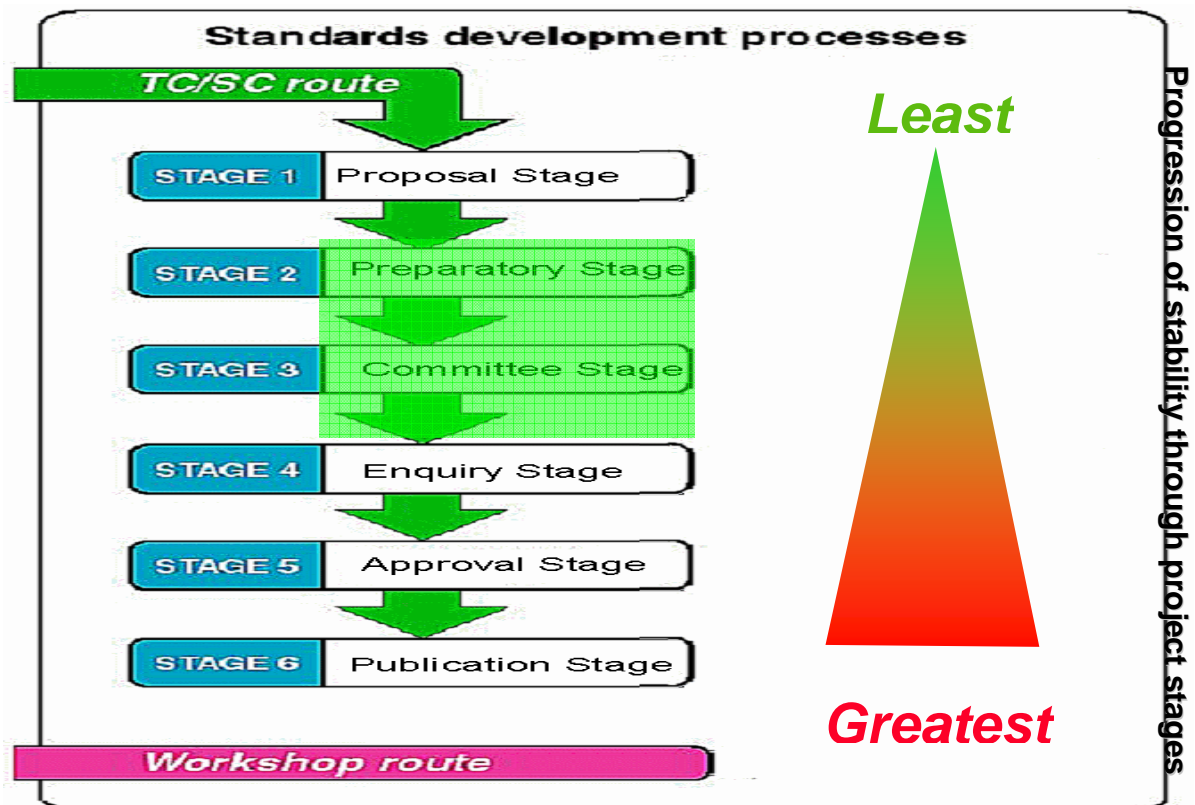
欧諸国を対象としてオーストリアのウィーンで開催された。最後のワークショップは、参加国が非常に多く、これらの国々が後に ISO 26000 プロセスにも参加したことから、特に成功を収めたことが実証された。ハイライトは、モンゴル副首相が出席してモンゴル議会で開催されたワークショップ、社会省大臣が出席して魅力的で華やかな都市ドバイで開催されたワークショップだった。最も出席者が多かったワークショップの 1 つは、フィリピンのマニラで開催されたワークショップで、約 200 名が参加した。ここでは、出席した TG コンビナーも、フィリピンの習慣で何らかの歌を歌わなければならなかった。時には過酷な旅になったが、このツアーには、モーリシャス、セントルシア、バハマなどの素晴らしい場所も含まれた。また、ベルグラード、キエフ、ニューデリー、カイロ、リオデジャネイロ、ボリビア、ジンバブエも訪ねた。

我々の関心は何であったか？人々から寄せられた質問は何だったか？我々は、多くの人に社会的責任に関心を持ってもらうこと、そして ISO 26000 のプロセスに積極的に参加してもらうことを望んだ。これがグローバルなプロセスであることを主張するとすれば、多くのステークホルダーに理解と参加を促し、積極的にメンバーにすることによって、そのノウハウや専門知識を取り入れ、我々がその国固有の文化やモラル、状況、ジレンマを認識できるようにする必要がある。このようなステークホルダーのインプットによってのみ、この規格を真にグローバルなものにし、ISO がすべての人たちのためにこの規格を策定していると主張することができる。人々はどんなことを質問したか？社会的責任とは何か、ステークホルダーとは何か、参加するにはどうすればよいか、国家が参加するにはどうすればよいか、どんな問題をカバーしているのか、規格の準備が整うのはいつかという質問から、この規格が認証可能でないのはなぜか（世界中で最も多く寄せられた質問）などの重大な質問まで、あらゆる質問が寄せられた。しかしまた、これは西洋的な価値を他の文化に押し付けて文化的な帝国主義を生むのではないかという重要な疑問、あるいは ISO 26000 が非関税貿易障壁として誤って使用される可能性があるのではないかなどの非常に基本的な疑問もあった。

概して、これは、発展途上国を、比較的複雑で、急速に変化し、明らかに言語的な違いの問題があり個々のアジェンダを持つプレーヤーがペースを合わせようとするプロセスに関与させるための優れたツールである。したがって、作業部会の総会よりも小規模で、地理的に近い場所で目的や可能性について説明して、リーダーシップと直接話し合う機会を与えることは非常に成功であったことが証明された。個人の参加者を支援し、異なるステークホルダーグループから均等な代表を確保する上での ISO DEVCO による積極的な支援は、このプログラムを有用なものにするために必要不可欠だった。継続的な参加とインプットを確保するために、我々は、CD 段階でもこのプログラムを継続することを強く提言する。

次のステップ

サンチャゴ会議の重要な目的の 1 つは、WD4.2 を改正して、会議後、委員会原案(CD)として回付するための適切な基礎を築くのに十分な数の問題を解決することだった。WG SR 及び IDTF の懸命な作業のおかげで、この目的は達成され、将来の ISO 26000 は、現在、CD 開発の段階にある。



ISO 第 3 段階（委員会原案段階）は、技術的な内容に関して合意（コンセンサス）に達するために、各国機関からのコメントを検討する重要な段階にある。この段階は、コメントを求め、又は投票のためにメンバー及びリエゾン機関に対して第 1 次委員会原案(CD)を 3 ヶ月間回付することから始まる。提出されたコメントはすべて、技術的な内容に関して合意に達するために検討される。WG SR の専門家は、改訂版準備のための文書作成作業を継続する。CD 段階は、プロジェクトが国際規格案(DIS)として登録を承認されたとき、すなわち、CD 投票結果がまとまったとき（合意に達したとき）に終了する。

ISO 26000 の CD は、現在、検討及びコメント用として入手することができる（2008 年 12 月 11 日から 2009 年 3 月 12 日まで）。寄せられたコメントと文書は、2009 年 5 月 18 日から 22 日までカナダのケベック市で開催される次回 ISO SR WG 総会で検討される。

附属書 A

WG SR に対する各国のインプットに関する ガイダンスを提供する ISO/TMB/WG SR 運営手順

ISO/TMB/WG SR N 131 rev 1（要約）

<http://www.iso.org/wgsr>でも入手可能

WG SR に対する各国のインプットに関する ガイダンスを提供する ISO/TMB/WG SR 運営手順

一般

国内委員会に該当する関係者を招集すること、又は他の正式なメカニズムを通して、関係者を召集するのは ISO メンバー団体の役割である。

該当関係者は、次に示す 6 つのステークホルダーグループに分類されることが望ましい。

- ・ 消費者
- ・ 政府
- ・ 産業界
- ・ 労働者
- ・ NGO
- ・ SSRO

これは、ISO/TMB/WG SR N 48 rev 1 (ステークホルダーグループの定義) に規定されたガイダンスを考慮しながら行われることが望ましい。

参加に関する詳細は、各国標準化機関に問い合わせること。各国の標準化機関は、<http://www.iso.org/iso/en/aboutiso/isomembers/index.html>の「Member Bodies」に掲載されている。

ISO メンバー機関による CD に対するコメントの提出 及び WG SR に対する国内ポジションの作成及び提出

ISO メンバー団体は、国内でコンセンサスのとれたポジションを反映するコメントのみを提出する。

国内コンセンサスポジション及び D リエゾンのコメントは、CD のテキストをどのように改訂したらよいかの WG 内でのエキスパート間の審議の基礎となる。コメント提出がないことは、既存のテキストへの支持の表明と判断される。

国のコメントに加え、ISO メンバー団体は、次の事項を行うことが望ましい。

- ・ 一つ以上のステークホルダーグループが参加しなかったのであればその理由を含め、国内ポジションの作成に参加したステークホルダーグループのリストを提出する。
- ・ 重要課題に関する国内ポジションへの反対があるときは、国内ステークホルダーグループの懸案事項を別途書類にて送付する。

WG 事務局は、これら個々の国内ステークホルダーグループがもつすべての懸案事項をコメント文書とは別に取りまとめるとともに、明らかになった傾向又はテーマを WG に提供する。

CAG との協議の上、CD から DIS へ進展させるのに十分なコンセンサスがあるか否かを判断するのは WG 議長の責任である。また、WG 議長は、この判断を下す際には、本文書に取りまとめられた情報を考慮することが望ましい。

WG SR に対する国内ポジションの作成及び提出

国内ポジション（コメント及び投票を含む）は、国内レベルにおいて全利害関係者によって作成されることが望ましい。

国内ポジションの作成は、すべて ISO のコンセンサスの定義に基づくことが望ましい。

“コンセンサス”：重要な利害関係者による問題への継続した反対がないこと、及びすべての関係当事者の意見を考慮し、意見の不一致を調停させる努力の過程があることを特徴とする全体的合意。

備考 コンセンサスは、必ずしも満場一致を意味しない。

コンセンサスは特に次の事項を含む。

- ・ 各ステークホルダーグループのポジションは、それぞれのグループに含まれるメンバーの人数に関係なく、公平に扱われることが望ましい。
- ・ コンセンサスを判断する基準は、賛成又は反対の絶対人数ではなく、ステークホルダーグループの賛成又は反対の数に基づくことが望ましい。
- ・ 国内ポジションについてのコンセンサスは、ステークホルダーグループ内又はその間での一致を必要としない。

国内ポジションを作成するときには、個人が WG SR において国際レベルで参画しているか否かに関係なく、各人のポジションは公平に取り扱われることが望ましい。

国内ポジションが明確化されたときに、それを WG SR に送付するのは ISO メンバー団体の役割である。

ISO/TMB/WG on Social Responsibility

- ・ 更なる詳細は <http://www.iso.org/sr> をご覧下さい。
- ・ ISO 参加に関する詳細は、代表団及び専門家向けのガイダンス “My ISO job” (http://www.iso.org/iso/my_iso_job.pdf) をご覧下さい。
- ・ WG に参加している組織は、<http://www.iso.org/sr> の「Organization」の項目でご覧いただけます。 <http://www.iso.org/sr>
- ・ ISO SR ニュースレターの無料購読については ISO/TMB/WG/SR TG 2 コミュニケーションの共同事務局の Nicki Islic までメール (SRnewsletter@csa.ca) でお問い合わせください